

NEWS LETTER

from Iwami Art Museum

March 2016 vol.23



島根県芸術文化センター
SHIMANE ARTS CENTER
島根県立石見美術館
IWAMI ART MUSEUM

島根県立石見美術館ニューズレター

企画展「マリメッコ展 —デザイン、ファブリック、ライフスタイル」

恋をして描く—マイヤ・イソラの暮らしとデザイン

企画展「原田直次郎展 西洋画は益々奨励すべし」

水の如き人

特別展「幼き衣へ」

「幼き衣へ」向けられたまなざし

23



ファブリック《シールトラプータルハ》(市民菜園) 図案デザイン:マイヤ・ロウエカリ 2009年
Siirtolapuutarha pattern designed for Marimekko by Maija Louekari in 2009

「マリメッコ展 —デザイン、ファブリック、ライフスタイル」

2016年4月23日(土)～7月11日(月)

休館日: 火曜日(ただし5月3日は開館) 開館時間: 午前10時～午後6時30分(展示室への入場は閉館30分前まで)



A



B



C

A. ファブリック《ウニッコ》(ケシの花) 図案デザイン:マイヤ・イソラ 1964年 Unikko pattern designed for Marimekko by Maija Isola in 1964

B. アトリエにて図案を描くデザイナーのマイヤ・イソラ 1960年代 マイヤは様々な技法で描き、デザインを考えた。
Design Museum / photo archives D.R. The organizer has made every possible effort in contacting the copyright holders.
If the proper authorization has not been granted or the correct credit has not been given, we would ask copyright holders to inform us.

C. ファブリック《カイヴォ》(泉) 図案デザイン:マイヤ・イソラ 1964年 Kaivo pattern designed for Marimekko by Maija Isola in 1964

恋をして描く—マイヤ・イソラの暮らしとデザイン

大きくて鮮やかな花柄。マリメッコ、と聞いてピンと来ない方でも、この《ウニッコ》柄(図A)であれば、一度くらいは目にしたことがあるだろう。マリメッコはフィンランドを拠点に製品を展開しているライフスタイルブランドであり、その主力製品は様々な柄の布製品である。暮らしを彩るインテリアや生活用品を1951年から提供し続けてきた。そのマリメッコを代表する図柄の一つが《ウニッコ》(ケシの花)なのである。この図柄は1964年にデザイナー、マイヤ・イソラ(1927-2001)(図B)の手から生まれた。マイヤは500を超える図案を、40年にわたってマリメッコに提供した。マイヤが生み出した人気柄は多く、《ウニッコ》の他にも、泉を意味する《カイヴォ》(図C)や、ヘタを下にしたイチゴを山に見立て、その周辺に晴れた空と雲を描きこんだ《マンシッカヴォレト》(イチゴの山々)などが知られる。マリメッコの人気やイメージの一部分を彼女の作品が担ってきたのは確かだろう。ここでは彼女の暮らしとデザインについて紹介したい。

マイヤ・イソラは1927年、フィンランド南部に位置するリーヒマキという町に三人姉妹の三女として生まれた。一家の暮らし家は自然豊かな場所にあった。楽器演奏や詩の創作などに優れた父の影響で、一家

の暮らしには芸術活動が溶け込んでおり、誰かの誕生日にはそれぞれが創作した詩を朗読し贈り合うなどした。恵まれた環境で幼少期を過ごしたマイヤは、その後芸術大学に進学し、そこでテキスタイルを学んだ。大学で開催されたプリント・ファブリックのコンテストに作品を応募すると、それが後のマリメッコ創業者、アルミ・ラティアの目に留まり、商品化される(1948年頃)。デザイナーとしての人生がここから始まる。

マイヤは恋の多い人生を送った。三度の結婚と離婚を経験し、その後も叶わぬ恋をしたり、長年の友人関係が恋愛に発展したりした。恋愛を通じて高まる感情や関心は、その時々でマイヤに旅や移住を促し、マイヤの世界を広げ、総じて制作に強く影響を与えた。最初の結婚は高校卒業前の1945年。翌年1月娘が生まれるも、48年に離婚。翌年にはのちに夫婦となる画家と旅に出ている。彼とはヨーロッパ中を巡ったのち、フィンランドで共に暮らしたが55年に離婚。彼との暮らしの中で創作意欲が刺激され、離婚後マイヤは本格的に制作を開始する。1959年、マイヤは絵画に関心の高かった裁判官、ヨルマ・ティッサリと出会い結婚。彼は自由に自宅で創作することを好んだマイヤに適した働き方をマリメッコに

提案し、実現させるなど、マイヤの創作活動に深い理解があった。ヨルマとの暮らしは安定していたようだ。1960年代、マイヤは先述の《ウニッコ》や《カイヴォ》を含む数々の名作を生み出した。しかし1971年にはヨルマとの関係にも終止符を打ち、パリで制作活動を開始。その後、友人と訪れたアルジェリアでその地の装飾や気候、その地での恋に刺激を受けて意欲的に創作活動を行ったが、恋は叶わず傷心でパリに戻った。1976年頃から長年の友人との間に恋愛感情が芽生え、安らぎや喜びが直接表現された多くの作品を残した。マイヤは人間関係をエネルギーとして制作する自身の傾向を自覚しており、それを「カニバリズム」と呼んだという。この言葉には、マイヤが男性たちを糧にするというイメージの反面、マイヤ自身の精神が大きく損なわれるイメージが重ねられている。事実マイヤは男性たちに依存せず、自由であることを重視していた。マイヤにとっての恋愛は創作の糧でありながら、中毒性の高い危険なものでもあったのだろう。

晩年のマイヤは森の中で静かに暮らした。沢山の恋を経てたどり着いたのは静謐な一人の時間であった。

(廣田理紗 当館主任学芸員)

「原田直次郎展 西洋画は益々奨励すべし」

2016年7月23日(土)～9月5日(月)

休館日:火曜日 開館時間:午前10時～午後6時30分(展示室への入場は閉館30分前まで)

企
画
展



図1



図2



図3

図1. 原田直次郎《ドイツの少女》
1886(明治19)年頃 東京国立博物館蔵 Image:TNM Image Archives

図2. 原田直次郎原画「於母影」挿画(『国民之友』第58号附録)
1889(明治22)年 島根県立石見美術館蔵

図3. 原田直次郎《連池》 制作年不詳 森鷗外記念館(津和野町)蔵

水の如き人

「原田は素と淡きこと水の如き人なり。余平生甚だこれを愛す」—森鷗外は、親友である原田直次郎(1863-1899)のことを『独逸日記』にこのように書き記している。「水の如き人」と評されたこの洋画家は、一体どのような人物で、明治の美術界にいかなる足跡を残した画家だったのか。原田直次郎の名は、美術史を学ぶ人たちにとっては、靴屋の親爺(おやぢ)《ドイツの少女》(図1)など、人物画の傑作を描いた名手として知られるが、残念ながら一般的にはそれほど知名度が高いとは言えない。その理由には、36歳の若さで亡くなったこと。病によって画家としての活動期間がわずか10年と短かったこと。そして現存する作品数が50に満たないなど、決して多くないことがあげられるだろう。

私たちが原田について知ろうとする時、冒頭でひいた言葉のように、文学者、鷗外の残した著作や周辺文献に依るところが大きく、その篤い友情とともに語られることが多い。実際、ドイツ留学中に会い、青春時代をともに過ごした二人の結びつきはとても強い。例えば、鷗外の文壇への最初の足がかりとなった翻訳詩集「於母影」の挿画(図2)を描いたのが原田であり、他にも幾つかの著作で協働したこと。そして原田が鷗外の小

説「うたかたの記」の主人公、日本人画学生・巨勢のモデルとなったことなどは、二人の深い結びつきを示す出来事だろう。友人としてだけでなく、鋭い人間観察眼をもつ鷗外にとって才能豊かな原田は、自分にはない素質を持つ興味深き観察対象でもあった。同時に、江戸幕府の瓦解以降、大きく時代が変動する中、原田は芸術で、鷗外は文学で、用いる剣こそ異なるが、新たな日本の価値観を築く闘いに身を投じた「同志」でもあった。それを象徴する出来事がある。1890(明治23)年、原田は西洋画の本格的な油彩技術を駆使し、日本の宗教的な画題で大作《騎龍観音》を発表するが、その表現や意図は理解されず、批判にさらされることとなった。すると鷗外が筆を尽くし、激しく反論したのである。これは当時も大きな話題となり、鷗外はこれを機に、美術批評の世界に足を踏み入れることとなる。二人の友情は原田が亡くなるまで続き、その死から10年後の1909(明治42)年、忘れ去られようとしていた友の画業を顕彰するべく、鷗外は原田の遺作展を開く。

しかし、原田の芸術やその果たした役割は、決して鷗外との友情のメランコリックな逸話だけに留まらない。当時の洋画家の技量水準からしても、遙かに抜きん出た卓越した

油彩画表現は、どのような環境で培われたものだったのか。鷗外の開催した遺作展以降、約百年ぶりとなる今回の展覧会では、ドイツ留学時代の師や同時代の画家たちにも注目し、新たな調査結果を交えて作品や資料群を紹介する。洋画排斥という当時の時勢や、兄の命を奪った結核に自らも犯されるなど、原田の人生には常に逆風が吹いていたが、死と向き合う病床にありながらも決して筆を絶つことをしなかった。迫真の世界を想像で自在に描き、鷗外に将来描きたい絵の夢を語った。また、洋画塾・鍾美館を自宅に開設し、分け隔てなく、惜しみなく自分の持てる技術を周囲に教えたことから、鷗外だけでなく多くの知友、弟子たちに愛された。原田を知ろうとすると「周囲にとにかく愛された人だった」ということを実感する。「水の如き人」と評された彼は、苦境を前にどこか飄々として、時に笑みさえ浮かべながら少し俯瞰した立場で自分の人生を眺めていたようなふしがある。それは通常の定義では計り知れない器の大きさであり、人間の生き方を私たちに示してくれる道標にもなってくれる。

(左近充直美 当館専門学芸員)

「幼き衣へ」

2016年3月5日(土)～5月8日(日)

休館日:火曜日(ただし5月3日は開館)

開館時間:午前10時～午後6時30分(展示室への入場は閉館30分前まで)

「幼き衣へ」向けられたまなざし

特別展「幼き衣へ」は、当館の企画展「こどもとファッション」とあわせて計画された。企画展は、子ども服を中心に据え「子ども」について考える内容である。日本の子ども服が、明治以降西洋の影響を受け和装から洋装へと変化した過程を、洋服を中心に紹介した。この展覧会を準備する中で、着られなくなっていく子どもの着物についても、取り上げられないかと考えていた。

そんな折、2014年春に大阪のLIXILギャラリーで「背守り—子どもの魔よけ」展が開催された。背守りとは、子どもの無事の成長を願い、その着物の背の部分にほどこした飾り縫いのこと。乳児から3歳頃までの子どもの着物は、一幅の布で身幅をとるため「一つ身」と呼ばれる。左右の布を背中心で縫い合わせる大人の着物と違って、一つ身の着物には背縫いがなく、そこから「魔物が入る」と信じられていたため、それを防ぐのに後ろ襟から背の中心などに縫い目を入れた。同展では、江戸後期から昭和初期頃までの背守りのある子どもの着物などが数多く展示された。明治以降、合理性や機能性の面から子どもの洋装化が推奨されてはいたが、他方当時の子どもの着物には背守りに代表される近代以前からの習俗が受け継がれていた。

同展には、それらを撮影した写真家、石

内都の作品も併せて展示され、子ども服に関わる豊かな手仕事のあり様を、着物そのものと石内の写真とにより見ることができた。

この特別展「幼き衣へ」では、LIXILギャラリーで紹介された作品から、背守りのある着物11点、そして子どもの着物を撮った石内の作品19点を展示する。

背守りのある着物は、いくつかある縫いのパターンごとに紹介している。背の中央に縫い目を施した「糸じるし」と呼ばれるものが最も良く知られている。男女により縫い目の向きに決まりがあるともいうが、必ずしも統一されていたわけではない。背中に長い紐を垂らしたもの、小裂を縫い付けたもの、麻の葉など魔よけの意味をもつ文様や吉祥紋を刺しゅうしたもの、そして布細工の一種で、立体的なアップリケともいえる押絵のあるもの(図1)など、背守りの多様なスタイルを見ることができる。

また、子どもとの関連から興味深い作例として、「JOAK」の文字が散りばめられた図案が目を引く《#58》(図2)があげられる。JOAKはNHKの前身で、1925(大正14)年日本初のラジオ放送を開始した。この生地を描かれているのは、ラジオの番組で募った子どもの詩の入選作である。ラジオという新しいメディアを表す英文字と子どもの詩のあるこの着物は、時流を映した作

例でもある。

一方、子どもの着物を撮った石内都(1947年生れ)は、日本を代表する写真家として知られる。母の遺品を撮影した《Mother's》や、広島平和記念資料館所蔵の被爆した衣服などを撮影した《ひろしま》のシリーズなど、衣服とそこに刻まれた記憶との関わりをテーマに作品を発表している。2014年ハッセルブラッド国際写真賞を受賞、2015年米国、J. ポール・Getty美術館で大規模な個展が開催されるなど国外での活躍もめざましい。今回は、背守りのある着物とともに、子どもの無事の成長を願い、近隣や親戚から寄せられた端切れで作られた、金沢の真成寺所蔵の百徳着物などを撮影した作品も紹介する(図3)。子どもの着物を撮った作品は、子どもの着物の生地の質感とそれが経てきた時間、そこに込められた母親をはじめとする大人の思いまでも鮮やかに写し出している。

子ども服の洋装化にともなって消えた習俗に光を当てる本展が、子どもにかかわる手仕事の豊かさや、子どもに向けられた大人のまなざしについても目を向ける機会となればと願っている。

参考文献:『背守り—子どもの魔よけ』LIXIL出版、2014年

(南目美輝 当館専門学芸員)



図1



図2



図3

図1. 石内都《#37》2014年 作家蔵
【実物展示】※着物は鳴海友子所蔵

図2. 石内都《#58》2014年 作家蔵
【実物展示】※着物は鳴海友子所蔵

図3. 石内都《#74》2014年 作家蔵
※着物は真成寺(金沢市)所蔵